

生命の享受

— 来間中学校跡地再生計画 —



K10044 小林 宏至

Keywords

学校外学習 享受 御嶽
ガジュマル 儀礼 農業

1. 序

来間島は毎年、3～4月には、島のあちこちで赤いデイゴの花が咲き、夏には、強い太陽がエメラルドグリーン
の海を一段と輝かせ、秋には、サシバが羽を休めに飛ん
でくる。

そして年間23回の御願行事がある。

神々の住む場所がいたる所にあり、
神高の島と呼ばれている。

2. 研究背景

来間島は少子高齢化で人口流出が続き、集落が縮小し
つつある。この現状に島の住民は、集落を活性化させたい
と思っている。また、来間島は移住先として人気があり、
移住者も多いが、定住し続ける例は少ない。その理由
として、移住希望者に生活の手段、農業の知識がない
からである。島には、この島で培ってきた農業の知識や
生活の知恵を教えたいと考える人達がいる。一方、島外
には、定住に必要な生活の手段、農業の知識を知りたい
人達がいる。両者をつなげる必要があり、この来間島で
知識を伝達する空間を提案する。

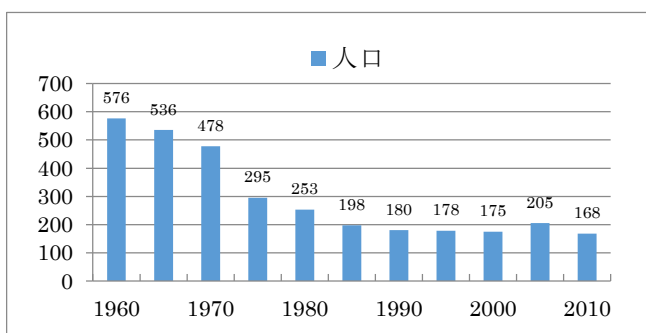


図1 来間島人口推移

3. フィールド調査報告

3.1 日程

2013年8月17日～9月1日

3.2 調査方法

デザインサーヴェイ

3.3 考察

来間島の人達は神や精霊といった現代人が忘れてしま
った観念を身近に感じ生きている。来間島にはたくさん

の神が住んでいる。東の御嶽の男の神ティンガナス、西
の御嶽の女の神タカガン・ティンティフク。集落のあち
らこちらに、里の神をまつる小さな御嶽がある。各家庭
でも、台所にはウカマ（お釜）ガミ、床の間にはトゥ
コロガミ、家敷の庭の東側には屋敷神がまつってある。そ
して家に入ってすぐの部屋（二番座）には、先祖をまつ
る仏壇が置かれている。一年を通じた様々な御願行事、
里の神への信仰、先祖の供養、子供の成長祝いなど、来
間の生活は、神なしには考えられない。神と共に暮らし
ている土地に私が今まで学んできた現代的な建築をその
まま持ってきても調和しない。

4. 設計趣旨

「享受」という意味は、受け入れて自分のものとする、
受け入れて楽しむことである。ここでの生命の享受とは、
楽園と言われる土地の生きる力を島の人と島外の人がそ
れぞれ取り入れ、自分の生きる力にしていくことを示す。
年齢・性別・学歴・職歴は関係なく、島外からは、島の
住民から生活の知恵・農業のやり方等、自分が学びたい
ことを学べる場所が必要である。しかし、住民の知恵を
どう取り入れて、どう発揮するかは自分次第である。楽
園と呼ばれるこの地で都会で負った傷を癒す人もいれば、
何かを見出す人もいる。一方、島からは、島外から来る
人がこの島に何を望み何のためにくるのかを知る。島外
と島内の人が双方で力や知識をやりとりするような「学
校外学習施設」を計画する

5. 敷地

沖縄県宮古島市下地字来間に位置する来間島。

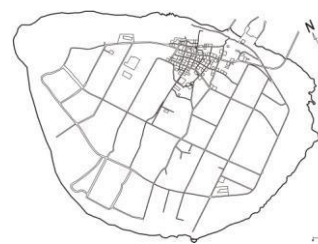


図2 島全体図



図3 宮古諸島

来間島は、宮古島の南約1.6kmに位置する、周囲約
6.5km、面積2.84km²の農業の島である。島の北側の高台に
幼・小・中学校を中心に民家が88軒ほどあり、南の海岸

線までなだらかな畑が広がっている。主な産業はサトウキビや葉タバコの栽培である。敷地は今年度で廃校が予定されている中学校跡地とする。合わせて中学校の駐車場、空き家を敷地として設計する

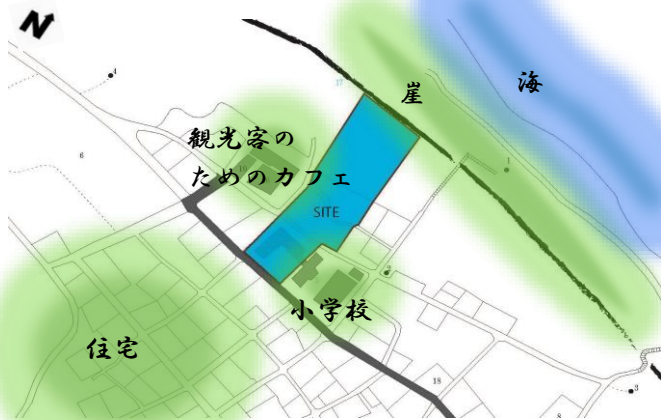


図4 来間島集落詳細図

6. プログラム

敷地に与えるプログラムは以下の通りである。

6.1 学校外学習施設

島外と島内の人が知識を伝達する場

学校外学習施設では、1階フロアを生業学習エリア、2階フロアを文化学習エリアとし、3階は図書室、屋上庭園となっている。1階の生業学習エリアはピロティエを用いて、ハイビスカスの壁で空間を仕切る事によって半屋外空間を生み出す。この半屋外空間で、移住希望者は生業となる農業を住民から学ぶ。農業の道具のレクチャー、一日の農業実習が終わった後の講義や反省会をここでやる。2階の文化学習エリアではフロア東側に舞台・講義室を計画する。フロアの東側に計画したのは来間島では東方上位という考えがあり、来間の住宅では東側の空間を1番座と呼んでいて、主に客間として使っているからである。この場所で来間の踊りを学び、儀礼を学び、方言を学ぶ事で最初は客であり、島外の人であった移住希望者がこの場所で学び、触れ合うことで島内の人が変わっていく。西側には子供室と5m×5mのスキップフロアの展示室を計画する。小さい子供連れの学習者・観光客として見学する人達が子供を預ける場所である。スキップフロアの展示室は全部で8段あり、2階フロア側の4段は来間島のヤーマスウガンという豊年祭等の儀礼に関する展示をする。3階フロア側の4段は来間島の住人が作った民具や、来間小学校の生徒が作った作品を展示する。

6.2 宿泊施設・人口の森

ガジュマルをモチーフにした1辺が7.5mの三角錐の屋根からなる人工の森の中に5つの宿泊施設を点在させる。宿泊施設は移住希望者が農業を長期で学ぶために宿泊する場所であり、同時に来間島への観光客が宿泊できる場所でもある。5つのうち2つは部屋の間仕切りがない9人まで宿泊できるドミトリタイプ、残りの3つは2~3人用

の部屋と4~6人用の部屋の2部屋タイプである。両者とも共用の風呂、トイレ、キッチン、そしてテラスがついている。

6.3 海へのアプローチ

海へのアプローチとは学校外教育施設から海へと続くミチの事である。学校外教育施設の北側は崖になっていて、さらに北には海が広がっている。海までは高低差40mあり、この高低差を活かし、海までのミチを計画する。学校外教育施設から10m降りた所に展望台を計画する。展望台へと続くミチは崖を掘り込み、コンクリートの壁をつくる。壁で切り取られた空と海の景色がピクチャーウインドウになるようにミチを計画している。展望台はそこまでのミチから一変して、長さ6m、高さ1.5mのガラスの壁に囲まれ、開かれた空間になっている。

7. 設計手法

7.1 御嶽

御嶽(ウタキ)とは琉球の神話の神が存在、あるいは来訪する場所であり、また祖先神を祀る場でもある。学校外学習施設の計画には御嶽の要素を取り入れる。御嶽は祖先神を祀り、祖先の知恵を守り続けている。この施設も来間島の祖先の人達の知恵を受け継ぎ、伝えていく場所となる。



写真1 御嶽



写真2 ガジュマル

7.2 ガジュマル

ガジュマルは沖縄に植生する大木だが、外見はとても異様で近寄りたがたい。しかし、その大きい枝は太陽の強い日差しを遮り、濃い影を作り出す。そこに風が通り、とても涼しく、快適さでこれ以上の空間はないと言われている。

人工の森はガジュマルの巨木のように、日差しが強く暑い沖縄で快適な空間を作ることができる。また、ガジュマルは精霊の宿る木でもあり、魔除けとしての役割もあることから敷地配置において重要な意味を持つ。

参考文献

- 1) 象設計集団 「空間に恋して」 工作舎 2004
- 2) 原 広司 「集落の教え」 彰国社 1987
- 3) ジュニア・チャンプルー 一 大竹康市咆哮集一 1993
- 4) 砂川智子 「楽園の花嫁」 ボーダーインク 1996
- 5) 松井健 「儀礼と口承伝承〜宮古群島来間島の事例を中心に」 『国立民族学博物館研究報告』 1986

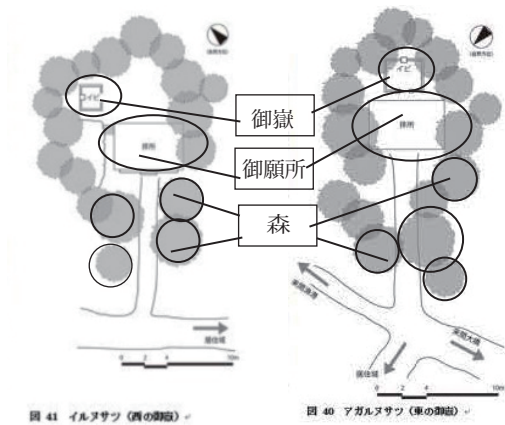
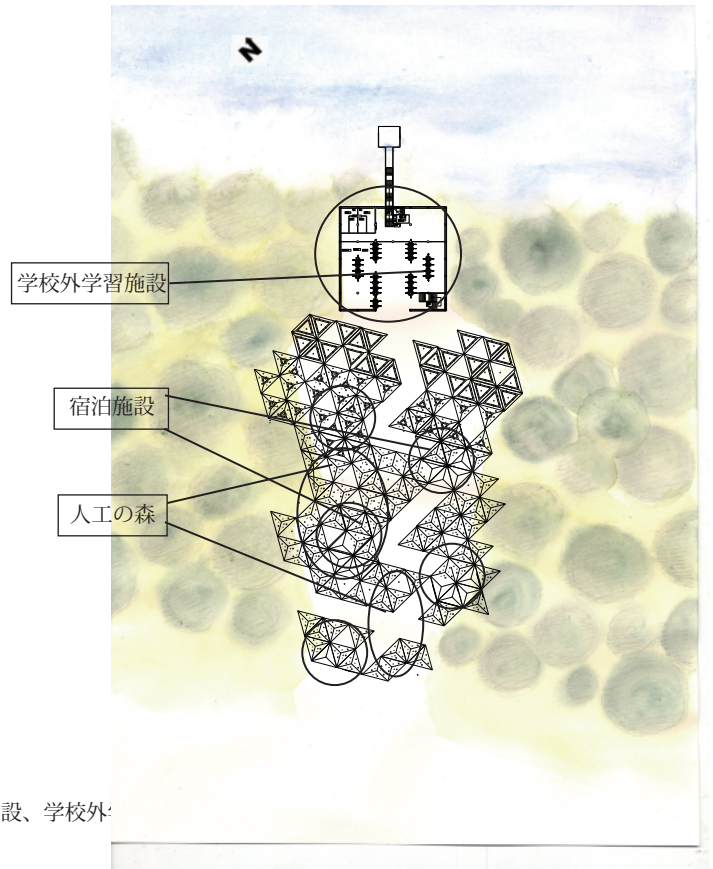


図 41 イリモサツ (西の御嶽)

図 40 アガササツ (東の御嶽)

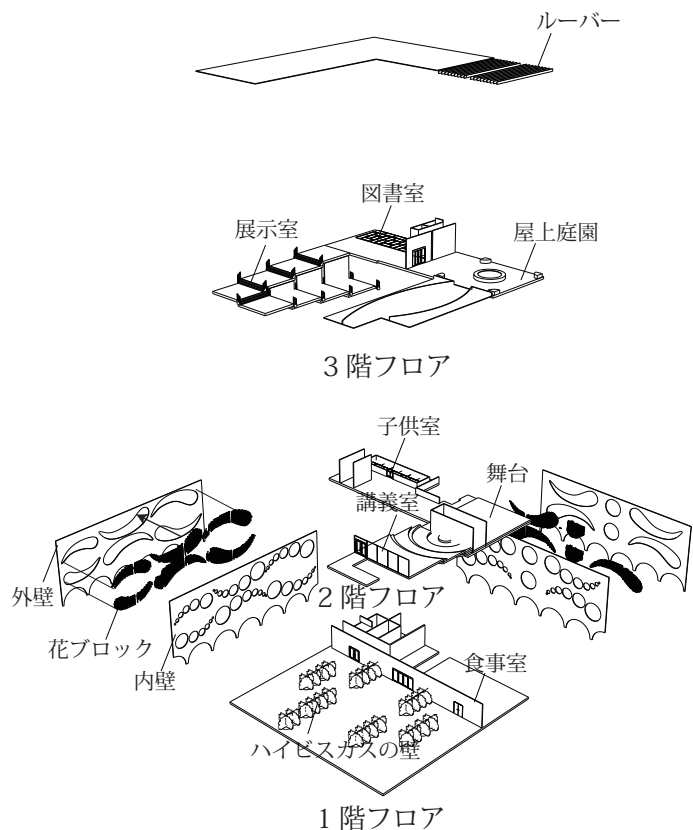
来間島で最も神聖とされている
東の御嶽、西の御嶽は
どちらも入口から
林、御願所 (ウガンジョ)、御嶽
という配置になっている。御願所とは儀礼を司る
女達が3日3晩籠り祈りを捧げる場所である。
本計画はこの御嶽の配置の要素を抽出し、
敷地南西からガジュマルをモチーフにしたガジュマルの森、宿泊施設、学校外



沖縄の厳しい暑さを和らげるために、
建物内に

- 風を遠し、
- 水を流し、
- 光を妨げ、
- 植物を置く。

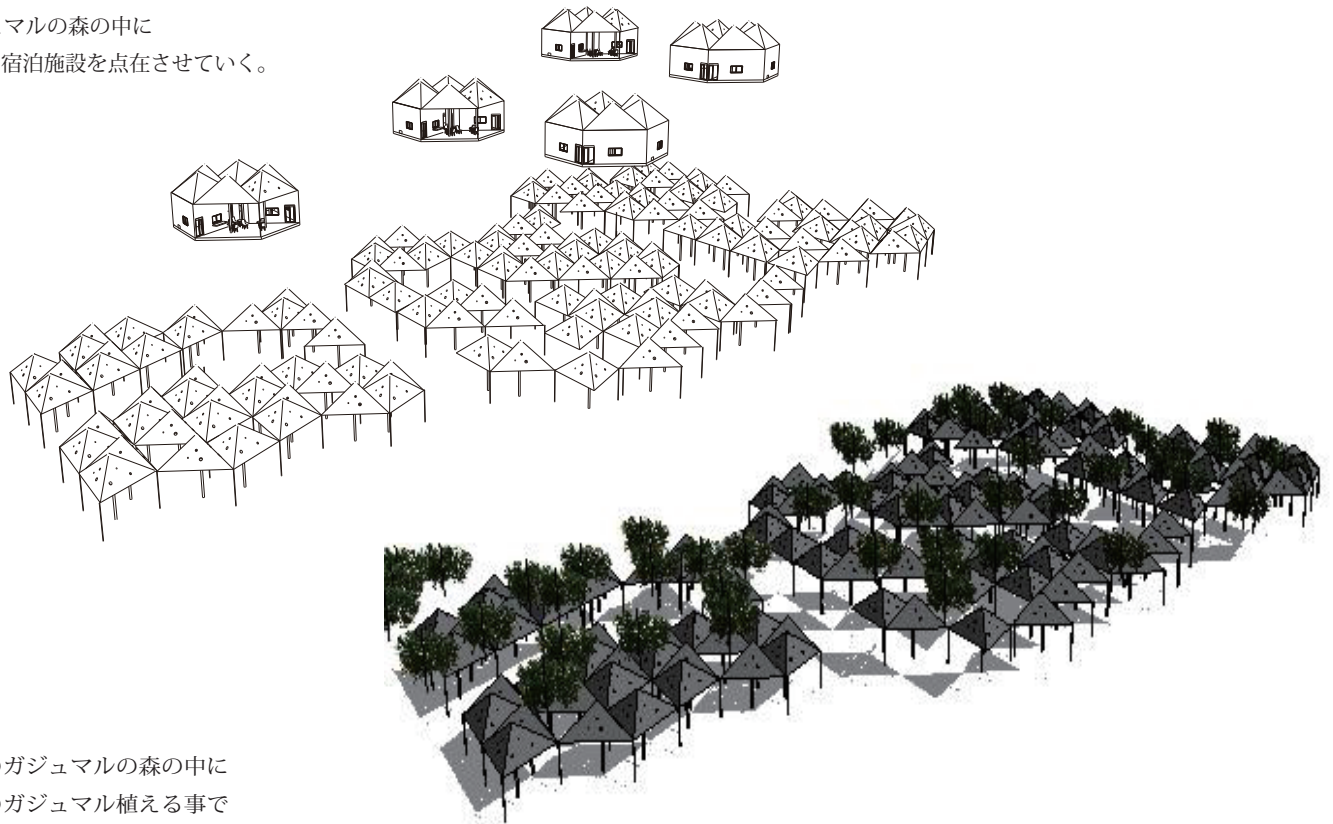
沖縄の強い日差しが直接ガラスに当たらない様に、
外壁に花ブロックを用いる。
ダブルスキンにする事で壁から入る熱を防ぎ、
台風のような強い風を和らげる。
南西方向の外壁の周りに水を流す事で、
水を含んだ風が建物の中に入ってきて暑さを和らげる。
一階部分にハイビスカスの壁、
屋上庭園にブーゲンビリアを置く事で防風林として
来間の強い風を制御する。
ハイビスカス・ブーゲンビリアの赤い花はコンクリートの空間に
色を持たせる。



3

ガジュマルの森

ガジュマルの森の中に
5つの宿泊施設を点在させていく。



人工のガジュマルの森の中に
本物のガジュマル植える事で
数十年後、さらにこの来間島に調和していく建築になる。

4

高低差

来間島には、自然方位から 45° ずれている民俗方位があり、
その南北方向に高低差が生まれている。
この高低差を活かし学校外学習施設から海へと続くアプローチを計画する。

